

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	長崎短章
Author(s)	犬養, 孝
Citation	龍南, 209: 14-17
Issue date	1929-02-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/9168">http://hdl.handle.net/2298/9168</a>
Right	

# 長崎短章

犬 養 孝

## 1 切支丹

山と山、大村灣銀色に光つてゐる。

「いよいよ近くなつたね。急に明るくなつたぢやないか。」

「あら、段畑がふえてきてよ。」

守つ子と赤ん坊、段畑の上で萬歳。

早岐、諫早、浦上。

「この邊の山影ね、きつと。かくれ切支丹達がマリヤ觀音を拜んだのは。今でもその邊にゐるかも知れないわよ。あら、あれは？」

車窓の小丘に赤煉瓦の建物見えてくる。その上のクルス、午後の陽に燦然と十字を切る。赤ら髭の男、手を合せて、

「浦上の天主堂ですたい。」

クルス、あらためて燦然と輝く。

## 2 港の展望

只今宿を町を見下される高臺に取りました。大變氣持のいゝ宿です。建物といひ、造作といひ、南蠻と唐とごつちやにしたや

うな、どちらかといふと唐趣味の、ちつと見てゐると香り高い「ナガサキ」を感じさせるやうな所です。庭下駄をつつかけて榻に腰かけると港は一眸の中に展覧されます。

右手に稻佐山、下に長崎の町、こみ入つた狭い通り、港の海の色、ぐるりの山に木魂して響く汽笛、大波止に横づけになつてゐる二本煙突、出島、……その先の大浦の天主堂のクルスは遠く港を見下してゐます。僕はあの輝きの中に二十六の殉教者の魂を感じました。

長崎の港、實際、一寸見ればどこにでもある町の眺めかも知れませんが、ちつと見てゐると、阿蘭陀船を浮べることも、唐船を浮べることも、それから港に飄つてゐる無數の旗の中から出島に立てられた旗を探することも出来なくはありません。出島と江戸町の橋を渡つてゆく、黒坊と阿蘭陀紳士へ探すことが出来ます。一寸した時、長崎見物の自分を感じ、一寸した時、下の<sup>いまだな</sup>鰯道の横つ丁から……

僕は日没の、稻佐山を赤く染め出してきた時、何かメーラザンの鐘、でなければ南蠻寺の鐘が響き渡つて來さうな気がしました。食卓の上にはお茶とカステーラ。

### 3 萩原祐佐

角をまがると、夕日は焼けつくやうに狭い整道に照りつけてゐた。古川町だ。僕は低い家並の家毎に南蠻鑄物師を物色したが、見給へ。僕の足元の軽い傾斜のついた鰯を、うねつても、くねつても、滑りながら蛇が屈曲を續けてゐるのだ。僕はぞつとすると同時に、忽ち寛文年間の古川町を歩いてゐるやうな気がし、風一つなく動かない簾の向ふに、青銅の踏繪を膝にのせた祐佐をちらつと見たやうに思つた。

再び、角をまがると、黒ずんだ家並の向ふにかま首を擡げた蛇が描かれ、しかも夕日に赤く光つたその眼に、十字架上の祐佐を感じた。十字架上の祐佐は？、僕はためにしに、ふと、うしろを振り返つた。

4 出 島

縣廳、「南蠻寺コンパニヤ、ジェズス趾」から江戸町へ出ると川一重、東京の河岸のやうに石垣の出島が見える。阿蘭陀屋敷は倉庫にかはり、「傾城の外入るべからず」の制札は「このところ汚物を投棄すべからず、市役所」に變つてゐる。

5 大浦天主堂

どこからも見えてゐたクルス、高く空に描かれたクルスを見ながら、石段を上つてゆくと、僕自身いつかあのクルスが限りなく懐しいものと思はれてきた。正面の扉を開けた瞬間、僕の中の浦上信徒は、いや僕は、明に正面の受難の聖像の前に跪いた。聖像は長崎の町と、海を越えて稻佐の山なみがかぎる西の空に、向ひあつてゐた。僕を導いた人は

「この方がフランシスコ、ザベリヨ様で……」

「これが二十六聖人殉教の圖で……」

さうしてゐるうちに、地味な四十がらみの女が聖像の前に跪坐してゐた。港の汽艇のゆきき、今も浦上舊信徒發見紀念のマリヤは、高い石段の上から、港一面を見はるかしてゐる。

6 唐 寺

午下り。

感じのいゝお寺だね。支那にゐる見たいだ。」

「玉巻芭蕉つてこのことぢやないの？、きつと阿茶さんがもつてきたのよ。」

「何もかも赤づくしで、何か龍宮のやうだね。」

二人、樓門を過る。樓門、夏の陽を射返して髻を薄赤に染める。壁によりかゝつて落書してゐた狂女、手を止めて急に泣き出す。二人ふりかへると爪を噛みながらげらげら笑ふ。大きな鼻と口。薬で結んだ髪。

横つ丁から出て來た犬けたたましく吠えると、尾をたれて、壁に沿ふた日影に走る。二人ゆく。

間。「どこかで歌澤をやつてゐるね。」

## 7 茂木の港

山あひから見えてゐた長崎の町に最後の「さよなら」を送れば、道はたゞ枇杷の木が多い閑散とした茂木の港に向ふのだ。あわただしい歩きに夏を忘れてゐた僕は、一面枇杷の山で取り圍まれた茂木の港、その下に廣がる千々岩灘に、再び南國の夏を取り戻した。明るくつて、眞蒼で、豊かな茂木の海は？

が、波一つ立たないで和んだ海の面にはくらげさへもそれと分つた。

(1929・1)